

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：34427

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02350

研究課題名（和文）植民地期朝鮮の職業書芸家における「書」認識に関する研究

研究課題名（英文）A research and study in recognition of calligraphy by professional calligraphers lived in colonial Korea

研究代表者

金 貴粉（KIM, KWIBOON）

大阪経済法科大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：20648711

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000 円

研究成果の概要（和文）：朝鮮王朝時代まで朝鮮の「書」は、伝統的枠組みの中で歩みを続けてきた。しかし、植民地期以降、日本を介した「美術」の導入によって、本来区分が厳しくなかった書画は「書」と「画」に分離させられることになった。果たして、日本の植民地化以降、「書」は朝鮮においてどのように認識されるようになったのか。

本研究では「衰退の一途を辿った」とするなかば通説化した旧来的な見方に変更を加え、この時期に登場する職業書芸家の「書」認識を個々の具体的な活動や作品、当時の日本書道界との関わりを具体的資料から検討することによって明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の目的達成のため、日本、韓国における植民地期朝鮮の職業書芸家作品ならびに関連資料の現地調査を行い、記録したデジタル画像、関連資料を基に分析を行った。同時に日本人書家による朝鮮書芸作品評価を明らかにするため、関連資料分析を行った。その結果、朝鮮人書芸家による「書」が、植民地期以前に体得した中国書風を基礎においた上で、さらなる発展を目指したものであることが明らかになった。これは「衰退の一途を辿った」とする従来の評価とは異なっており、その点において学術的意義があったといえる。

研究成果の概要（英文）：Korean calligraphies had been developed within traditional frameworks until the end of Korean Dynasty. However, since the colonial period, Korean calligraphies had divided into two pieces “Writings” and “Drawings” by introducing art field from Japan. After all, how did the calligraphy become recognized in Korea after the colonization of Japan?

In this study, I looked through a different perspective from the traditional view that was generally accepted “Korean calligraphy has gone through a decline.” I also clarified by examining concrete data that recognitions of “calligraphy” in those professional calligraphers in this period through their individual activities, works, and their relationship with Japanese calligraphy field.

研究分野：朝鮮書芸史

キーワード：朝鮮書芸 書道 植民地期朝鮮 近代文化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 植民地期朝鮮書芸に関する先行研究は、韓国、日本両国においても、蓄積が僅少であることに加え、その評価は韓国書芸史研究の第一人者である任昌淳や『韓国書藝史』著書の金基昇においても、朝鮮が日本の植民地支配下におかれたことで、「衰退の一途を辿った」との認識にとどまり、それ以上の詳細な言及はなされていない。そして韓国での職業書芸家の評価はいわゆる「親日派」、「抗日派」とする作品自体ではなく、個人の政治的立場の取り方によって今日においても下される傾向がある。

その中で近年、1922年から1944年まで朝鮮総督府によって開催された朝鮮における初めての官設展覧会である朝鮮美術展覧会(以下「朝鮮美展」)に関する研究は美術分野を中心に進展が見られる。しかしその多くは朝鮮美術を植民地支配による影響という点から分析するもので、日本の官展との制度的比較に関する研究や、絵画における「ローカルカラー(地方色、郷土色)」に関する研究などが中心になっており、書に関する言及はほとんどなされてこなかった。

「朝鮮美展」に第1回から10回まで設置された書部門に関する研究は、わずかながら五十嵐公一らによるものがある。(五十嵐公一「朝鮮美術展創設と書画」『美術史論叢』19号、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部美術史研究室、2003年)五十嵐は、書部門が「朝鮮美展」において設置された背景について、当時の日本における書の位置づけや朝鮮人による書画団体の創設、関与を新聞記事等の分析から明らかにしている。また、喜多恵美子は朝鮮における「美術」の受容について、「朝鮮美展」の内容分析を踏まえて考察している(喜多恵美子「朝鮮美術展覧会と朝鮮における「美術」受容」五十殿利治編『「帝国」と美術 一九三〇年代日本の対外美術戦略』国書刊行会、2010年)。さらに李東華による出品作家の書風に着目した研究があげられる(李東華「植民地時代の官展美術と韓国近代の書についての一考察」『東京・ソウル・台北・長春 官展にみる近代美術』展示図録〔福岡アジア美術館他巡回展・2014年2月13日~7月21日〕)。

しかし、いずれの先行研究においても書部門が廃止される経緯について、当時日本で「書ハ美術ナラズ」として官展から排除されることになった影響によるものだったとし、植民地期以前の書の主な担い手である士大夫層が植民地期においてどのような書認識を持っていたのかという具体的な指摘はなされていない。植民地化以降、日本を通して流入した「美術」と異なり、「書」は植民地期以前から存在していた芸術である。それゆえ、植民地期朝鮮の「書」の実像を明らかにするためには、植民地期以前からの継続性をより重視しなければならないと考える。

さらに、植民地期においても展覧会に限らない書の実作の場を作品から具体的に検討する必要性が求められている。その一例として、佐野市郷土博物館所蔵の須永元文庫に収められている朝鮮人書画人たちの作品群があげられる。そこには、「親日派」、「抗日派」と分離された現代の評価とは異なる合作書画作品が残されているからである。

研究代表者はこれまで植民地期朝鮮において活躍した書芸家であり、鑑識家、研究者でもあった呉世昌に焦点をあて、その作品への中国書法からの影響を明らかにしてきた。(金貴粉「呉世昌における中国書法の受容と展開」『書学書道史研究』第21号、2011年)

また、ハンセン病患者・回復者の芸術文化活動に着目することで、審査報奨制をとる展覧会等の美術制度にとらわれない芸術活動のあり方について主に書道史研究の方法論から考察を進めてきた。(科学研究費補助金 若手研究(B)「ハンセン病患者・回復者による芸術文化活動の意味と芸術性」課題番号25770072・研究代表者 金貴粉、平成25年4月~28年3月)

植民地期朝鮮における書の担い手は政治家や学者で能筆家であった者に加え、職業書芸家が「朝鮮美展」等の近代的な美術制度とともに登場したという点はすでに韓国美術史研究者の李龜烈(「時代状況の変化と書藝」『韓国現代書藝史』通川文化社、1981年)によって指摘されているが、その詳細については明らかにされてこなかった。以上のことから申請者は職業書芸家の書芸活動に着目し、これまで行われてこなかった韓国、日本国内における悉皆的な調査・研究を行うことで、彼らの「書」認識を明らかにする。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、先行研究をふまえ、植民地期に新たに登場する職業書芸家の具体的な活動や作品に着目し、彼らの「書」認識を明らかにすることを目的とする。そのため、下記の4点を明らかにすることを試みた。

植民地期朝鮮における職業書芸家の誕生とその背景について解明する。

現存する職業書芸家の作品や関連資料の所在を調査・確認し、作品分析を行うことから「書」認識を明らかにする。

「朝鮮美術展覧会」における書部門の廃止に至る経緯を詳細に解析することで、書部門廃止を唱えた作家による「書」認識を明らかにする。

同時期の日本人書家による朝鮮書芸作品への評価や関係性について調査し、日本人による「書」認識の影響がいかなるものであったのかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 本研究が掲げる4つの目的を達成するために、日本、韓国における植民地期朝鮮の職業書芸家作品ならびに関連資料の現地調査を行う。特に研究対象である「書」作品のほとんどが韓国

にあるため、韓国内における実地調査が主となる。

職業書芸家として活躍していた呉世昌、姜璣熙、玄采、兪吉濬、尹用求、池昌翰、金台錫、李漢福ならびに朝鮮美術展覧会で審査員を行った丁大有、金敦熙、李道栄、徐丙五の作品を、韓国の所蔵先において実地調査を悉皆的に行う。さらに日本国内における所蔵先においても学芸員のご協力のもと、調査を行う。

作家の中には中国、日本においても活動を行っている者も多いため、作家に関する関連資料調査も合わせて行う。調査の際、可能なものに関しては、デジタルカメラで撮影を行い、記録化・リスト化する。

(2)日本人書家による朝鮮書芸作品評価を明らかにするため、当時の代表的な日本人書家・比田井天来によって歴代の朝鮮書跡をまとめられた『朝鮮書道菁華』(1930年)および、朝鮮総督府官吏であった工藤壮平『心無罣礙樓鷄林書存』(天理大学付属図書館蔵、1918年)の資料分析を行う。

(3)調査結果、ならびに関連学会等での報告、調査先で受けた専門家の指摘、意見を参考に分析を行う。

4. 研究成果

(1)研究課題である植民地朝鮮における職業書芸家の「書」認識を明らかにするため、植民地期朝鮮における職業書芸家の誕生とその背景の解明、現存する職業書芸家の作品や関連資料の所在の調査・確認を行うことを主目的とした。具体的には国内では佐野市郷土博物館、国立国会図書館を中心に作品や書芸家に関する文献調査を行い、海外では韓国(釜山博物館、釜山市立美術館、朝鮮通信使歴史館)、台湾(故宮博物院、高雄市立美術館)において実地調査を行った。特に佐野市郷土博物館においては須永文庫に残されている朝鮮書芸家の作品を実測、資料撮影を含めて複数回に分けて調査を行うことで、当時関係性のあった日本人書画人たちの関係や朝鮮人書画人たちによる活動、さらに朝鮮人書芸家の位置づけを明らかにすることができた。さらに台湾では植民地期朝鮮人書芸家たちが影響を受けた清朝の作品調査によって、同時期の漢字文化圏における関係性を明らかにする重要な知見を得ることができた。

(2)韓国の水原博物館、芸術の殿堂書芸博物館において朝鮮人書芸家の作品調査および分析を行うとともに、国立中央図書館の呉世昌文庫では呉世昌の蔵書分析を重点的に行うことで、彼の書認識形成における清朝考証学の影響について明らかにすることができた。蔵書内の同時期の売立目録の分析から、当時の日本人書家、好事家らの朝鮮美術への価値認識についても明らかにできた。

(3)当時の代表的な日本人書家であった比田井天来による『朝鮮書道菁華』(1930年)と、朝鮮総督府官吏であった工藤壮平『心無罣礙樓鷄林書存』(天理大学付属図書館蔵、1918年)の分析を行うことで、彼らの朝鮮書芸作品評価の視点について明らかにすることができた。その成果は、『『権域書画徴』制作の意図とその意義』韓国朝鮮文化研究会第18回研究大会(神田外語大学・2017年11月4日)において口頭発表を行い、広く成果を還元した。

(4)これまでの調査、分析において、朝鮮人書芸家らの実相を見ると、多くが官僚出身者であったことが明らかとなった。そのため、作品のみの分析に限らず、彼らの政治的な活動、移動範囲、同時期の国を越えた交友関係を含めた調査を行うこととした。そうした活動を明らかにするために、主に政治的な活動が把握できる調査先として、斎藤実記念館、韓国の釜山近代歴史館を加えた。その結果、日本と関係史に関する調査ならびに歴史上の政治家等、書人の書文化、環境について考察、分析することができた。

それらの成果は、「近代朝鮮における書の専門化過程とその特徴 官僚出身書人の動向を中心に」(第29回書学書道史学会大会・岐阜女子大学・2018年10月28日)、「書画協会の結成とその活動について」(シンポジウム「近代東アジアの書壇」筑波大学・近代東アジア書壇研究プロジェクト主催・2018年9月8日)として口頭発表し、広く成果を還元した。

(5)大阪市立美術館、東京文化財研究所、台湾の故宮博物院的調査により、同時代の中国における書家たちとの比較研究を行うことができた。また、前述機関の専門家だけではなく、韓国国立中央博物館、朝鮮美術研究者から職業書芸家の「書」認識に関する研究成果について専門家の見地からアドバイスをいただくことができた。それらの指摘をふまえ、植民地期朝鮮における職業書芸家の「書」認識について調査結果から分析を行い、具体的かつ立体的に明らかにすることができた。

(6)2019年に佐野市郷土博物館で開催された「須永文庫資料展 日韓の近代」展では、同博物館所蔵の須永文庫におさめられた多数の近代朝鮮人書画家らの作品を広く紹介するものであった。研究代表者は、これまでの本研究成果の一部を同展の記念講演会「須永文庫における朝鮮書画について 朝鮮人書画家たちとの交流を中心に」において、一般に広く伝えることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 金貴粉	4. 巻 第29号
2. 論文標題 「近代朝鮮における書の專業化過程とその特徴 官僚出身書人の動向を中心に」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 書学書道史学会『書学書道史研究』	6. 最初と最後の頁 59 - 71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金貴粉	4. 巻 第4号
2. 論文標題 「在日韓国人ハンセン病者の人生と歴史」（韓国語）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 淑明女子大学人文研究所『横断人文学』（韓国語）	6. 最初と最後の頁 27 - 50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 金貴粉	4. 巻 第17号
2. 論文標題 「『権域書画徴』制作の意図とその意義」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『韓国朝鮮の文化と社会』	6. 最初と最後の頁 P74 - p101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金貴粉	4. 巻 15号
2. 論文標題 「呉世昌の植民地期朝鮮における書学とその特徴」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『アジア太平洋レビュー』	6. 最初と最後の頁 p2 - p15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金貴粉	4. 巻 46号
2. 論文標題 「ハンセン病と在日朝鮮人 解放後における新たな闘い」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『人権と生活』	6. 最初と最後の頁 p6-p10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金貴粉・儀同政一	4. 巻 6号
2. 論文標題 「ハンセン病資料館事業部社会啓発課の活動と展望」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『国立ハンセン病資料館研究紀要』	6. 最初と最後の頁 p43 - p56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金貴粉・佐々木佑記	4. 巻 10号
2. 論文標題 「佐野市郷土博物館蔵「須永文庫」における書画作品 コレクション形成過程とその特徴 - 」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『大学書道研究』	6. 最初と最後の頁 99 - 108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金貴粉	4. 巻 12
2. 論文標題 「全盲連要請の不自由者看護職員切替と六・五闘争」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『ハンセン病市民学会年報2016』	6. 最初と最後の頁 110-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 978-4-7592-6780-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金貴粉	4. 巻 12
2. 論文標題 「在日朝鮮人韓国人ハンセン氏病患者同盟結成と年金問題」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『ハンセン病市民学会年報2016』	6. 最初と最後の頁 114-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 978-4-7592-6780-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金貴粉	4. 巻 26
2. 論文標題 「朝鮮美術展覧会における書部門廃止と書認識の変容」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『書学書道史研究』	6. 最初と最後の頁 45 - 58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金貴粉	4. 巻 1025号
2. 論文標題 「全盲連要請の不自由者看護職員切替と六・五闘争」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『全療協ニュース』	6. 最初と最後の頁 3 4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金貴粉	4. 巻 14
2. 論文標題 「ハンセン病療養所における在日朝鮮人と年金問題」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『アジア太平洋研究センター年報』	6. 最初と最後の頁 16 - 23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 金貴粉
2. 発表標題 「近代朝鮮における書の専業化過程とその特徴 官僚出身書人の動向を中心に」
3. 学会等名 第29回書学書道史学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金貴粉
2. 発表標題 「書画協会の結成とその活動について」
3. 学会等名 シンポジウム「近代東アジアの書壇」（筑波大学）、近代東アジア書壇研究プロジェクト主催
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金貴粉
2. 発表標題 在日韓国人ハンセン病者の生活と文学
3. 学会等名 淑明人文学研究所（韓国・淑明女子大学）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金貴粉
2. 発表標題 「『權域書画徴』制作の意図とその意義」
3. 学会等名 韓国朝鮮文化研究会第18回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金貴粉
2. 発表標題 “ The history of the National Hansen ' s Disease Museum in Japan ”
3. 学会等名 2016World Forum on Hansen ' s Disease (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考